論文内容の要旨

論文提出者	（氏名）　松尾　嘉之
論　文　題　目	Characteristics of maxillofacial morphology of Angle Class II patients with temporomandibular disorders involving crepitus

（論文内容の要旨）

研究目的

下顎頭の骨変化を伴う顎関節症を発症した患者の顎顔面形態は、下顎枝の短小化および下顎骨の後方回転を示すことが報告されており、関連が示唆される不正咬合として骨格性上顎前突や骨格性開咬が知られている。下顎頭の骨変化を伴う骨格性上顎前突と伴わない骨格性上顎前突では、上顎前突の成り立ちが異なると考えられるが、その詳細は明らかとなっていない。そこで今回、当矯正歯科に来院した下顎頭の骨変化を伴う顎関節症を発症した不正咬合患者のうち上顎前突症患者のみを抽出して、顎関節症を伴わない骨格性上顎前突症患者と比較することで、両者の顎顔面形態の違いを明らかにすることを目的とした。

資料および方法

福岡歯科大学医科歯科総合病院矯正歯科に来院し、初診時年齢が15歳以上の女性で、ANB角5.0度以上かつoverjet 4.5 mm以上で骨格性上顎前突と診断された48名を対象とした。対象のうち、関節雑音、疼痛、開口障害のうち少なくとも１つの既往か現症を示し、かつ両側下顎頭に骨変化を認める骨格性上顎前突症24名をCrpt群、顎関節症状を伴わない骨格性上顎前突症24名を非Crpt群とした。

下顎頭の骨変形の評価には初診時のパノラマ顎関節写真を用いた。初診時の側面セファログラム分析を行い、骨格系および歯系に関する形態学的項目について2群間の比較・検定を行った。

結果および考察

Crpt群では非Crpt群に比べて、下顎枝長と下顎長は有意に小さい値を示し、下顎枝傾斜角、下顎下縁平面角は有意に大きい値を示した。その結果、頭蓋骨に対する下顎骨の前後的位置関係は有意に後方位を示した。上顎切歯の歯軸傾斜角はCrpt群で有意に小さい値を示しており、overjetも有意に小さい値を示した。

結論

下顎頭の骨変化がみられる顎関節症を伴う骨格性上顎前突症患者では、顎関節症を伴わない上顎前突患者に比べて下顎枝が短く、下顎枝が大きく後傾し、下顎下縁平面が大きく急傾斜しているという特徴的な形態を示すことが明らかとなり、両者では、上顎前突の成り立ちが異なることが示唆された。